

「声」

ヨハネの福音書 1:19~28

1:19 ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。

1:20 彼は告白して否まず、「私はキリストではありません」と言明した。

1:21 また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」

1:22 そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」

1:23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」

●預言者ヨハネ。通称「バプテスマのヨハネ」は、エルサレムの祭司とレビ人に会い、自分について「私は荒野で叫んでいる者の声」だと言いました。

イザヤ 40:3

荒野に呼ばれる者の声がある。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。

●たしかにイザヤ書にはこのように記されています。ではこの「荒野で叫ぶ者の声」とは一体何なのでしょう。ヘブル語で「声」のことをコール(קול)と言い、他に「音、雷、角笛の音、軍勢の騒ぎ」などの意味があり、誰かが一人で叫んでいるようなものではないことが解ります。そしてそのコールは荒野にいます。荒野に轟く雷鳴、角笛の音、大勢の人の群れ、これは出エジプト記にある、モーセを指導者として 40 年間荒野を旅したイスラエルの民に結びつくと考えられます。

出エジプト

19:1 エジプトの地を出たイスラエル人は、第三の月の新月のその日に、シナイの荒野に入った。

19:16 三日目の朝になると、山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。

●これは神がイスラエルの民に「十戒」を始めとする律法をお与えになる場面です。荒野、雷、角笛、そしてイスラエルの民。ヨハネはこの出来事を思って「荒野の声」という表現を用いたと考えられます。因みにこの場面について、使徒の働き の 7 章で、聖霊に満たされたステパノがこう証言しています。

使徒の働き

7:38 また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。

●この荒野の「集会」という言葉はカーハール(קָהַל)で、先ほどのコールを語源としています。イスラエルの民はいつも角笛の音、コールを聞いて集まっていたからです。つまりコールには「集める」という目的が伴っているのです。そしてこのコールが、聖書の中で最初に用いられるのが創世記の3章です。

創世記

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

●神はエデンの園において「声」コールを発せられました。このコールが聞こえたら、人とその妻、つまりアダムとエバは神の御許に集まることが決められていたのでしょうか。ところがこの時すでに悪魔に騙され、罪を犯していたアダムとエバは集まることができませんでしたが。

●このように、ヨハネは自分を指して「イスラエルの民を集める」ためのものであると証言したのです。そしてその目的は、ステパノも言うように律法、すなわち「生けるみことば」を与えるためでした。生けるみことばとは何でしょうか。荒野の声であるヨハネの後にやって来られる方、まさに生けるみことば、イエシュアです。そしてそのイエシュアは、荒野において神がイスラエルに与えられた「十戒」を始めとする律法の体現者であり完成者、つまり完全に成就して下さる方なのです。モーセに率いられたイスラエルの民は、みな荒野で滅びてしまいました。しかしイエシュアに従って、この方について行く者は約束の地、神の「御国」に入ることができるのです。ですから荒野の「声」コールにはただ「集まる」だけでなく「ついて行く」「付き従う」という結果が伴わなければならないのです。そのことがこのコールを構成するヘブル文字の中に表されています。

- ・ コーフ(ק)…人の後頭部を象った象形文字です。巡回、周回、巡る、回復などの意味があります。
- ・ ヴァーヴ(ו)…釘、杭を象った象形文字です。「上から下る」ものという意味があります。
- ・ ラーメド(ל)…杖を象った象形文字です。権威、訓練、学ぶという意味があります。

これらの意味を組み合わせると

「上から下って来た権威、指導者の後について回り、学び、訓練を受ける」

という意味があることが解ります。つまりヨハネは、自分は「メシアであるイエシュアにつき従う者たちを集める声」コールだと証言したのです。このコールによって集められた者たちが、カーハールすなわち「集会」です。このように、私たち「教会」もこのカーハールと全く同じ特性を持っていることが解ります。ですから私たち教会の起源は、ステパノが証言した「荒野の集会」にあり、そして更に遡って、エデンの園において神がアダムとエバを集めようとされた神である主の「声」コールにあると考えられます。神のご計画である「御国の福音」とはこの「エデンの園の回復」のことです。そしてそれはエデンの園という場所が回復することよりも、アダムとエバが罪を犯す以前の状態、神の「声」コールによってカーハール、集会が持たれること、そしてその集会とは、神と人とが顔と顔を合わせて交わる交わりであり、美しい、完全な関係です。

I コリント

13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

●この神と人の交わり、関係の回復こそがエデンの園の回復であり、神のご計画である「御国の福音」なのです。ヨハネはその為に立てられた預言者の一人であり、その自らの立場と役割を 19 節にあるように、祭司とレビ人に対して証言しました。どちらもイスラエルが神と交わり、礼拝をささげること、つまりカーハール、集会における中心的存在であり、律法の専門家、当時の霊的指導者たちでした。荒野の声、祭司、レビ人、この出会いは決して偶然ではありません。この出会いは明らかにステパノが証言した「荒野の集会」を指し示す「しるし」です。神はモーセを通してこれらの存在を召し出されましたが、実際には神との親密な交わりを許されたのはモーセだけでした。

申命記

34:10 モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、顔と顔を合わせて選び出された。

神と顔と顔を合わせて交わり、自分のあとから来られることをヨハネは知っていました。

1:24 彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。

1:25 彼らはまた尋ねて言った。「キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」

●パリサイ人とは、いわゆる律法主義に生きる人々で、律法を禁止と命令の書として捉え、それを遵守することに価値を置いている人々でした。つまり「人は正しい行いによって救われる」と解釈し、自分たちこそがそれだと主張していました。ですから彼らは自分たちにとって異質な存在であるヨハネに対して警戒心を持ったのです。当時ヨハネのもとに大勢の人が集まり、その言葉に耳を傾けていました。ですから当時の霊的指導者であったパリサイ人たちにとってヨハネは、自分たちの地位を危うくする存在と思われたのです。

1:26 ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。」

●これに対してヨハネは答えません。ただ「あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っている」と言いました。つまりヨハネがなぜバプテスマを授けているのかということを理解できないように、もしくは理解できないならば、あなたがたの中、つまり同族であるユダヤ人として、メシアであるイエシュアが来られても、あなたがたはきっと理解できないと言っているのです。つまり律法を禁止と命令の書としてしか理解できないならば、生ける律法、生けるみことばであるイエシュアを理解することはできないということです。

1:27 その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」

●このように、ヨハネは自分の存在を単なる「声」だとし、その働きの理由も明言しません。要するに注目さ

れたくないのです。「私はその方のくつひもを解く値打ちもない」とは、「どうせ俺はダメな男さ」と卑屈になっているのとはわけが違います。私ではない、私の後から来られる方を見なさいと強調しているのです。「荒野で叫ぶ声」それはイエシュアを指し示す声でした。

1:28 この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた。

●ヨルダン川の向こう岸、つまり東にあるベタニヤとなっていますが、考古学的にはヨルダン川の東にはベタニヤという地名はなく、実際ベタニヤがあるのは西側で、しかもヨルダン川からは直線距離でも 20km 以上も離れた山間の村で、そもそも水でバプテスマを授ける場所としても無理があります。これはベテアラバ (בֵּית הַעֲרָבָה) だとする説が有力です。「荒地の家」という意味があり、文脈から考えてもこちらの方が意味が繋がります。そしてヨルダン (יַרְדֵּן) は、ヤーラド (יָרַד) 「降りて来る、下る、降りて行く」という意味の派生語で、これらの意味を合わせると、コール、そしてカーハールが示す「荒野の集会に降りて来られた神の姿」が表されていることが解ります。

出エジプト

19:19 角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えられた。

19:20 主がシナイ山の頂に降りて来られ、主がモーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。

20:1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。

●ここで告げられたことばがああ「十戒」です。このように、ヨハネとそのあとに来られる方、すなわちイエシュアの繋がりと、出エジプト記に描かれる荒野の声、雷鳴、角笛のあとに「十戒」が与えられる流れが、結びつくように記されているのです。まさに

ヨハネ

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

です。ですから、十戒を始めとする律法はすべてイエシュアを指し示すものであり、イエシュアが成就、成し遂げてくださる御業であることを覚えなければなりません。それが律法すなわち聖書が、喜びの知らせ、グッドニュース、福音となる所以です。